

出前授業 その6 6年生社会「江戸の文化と新しい学問」

授業時間の目安・・・45分～

①会場は主に教室で行います。江戸時代の青森県にかかわる資料を持ち込んで、授業を行います。

出前授業実施案例・・・（90分の場合）

学校側のねらいは？

- ・江戸時代の青森県がどのような場所であったかを知ることができる。

郷土館の手立て

- ・実物資料やデータ資料を使って江戸時代の青森県の様子を想像させる。

本時の学習活動

教師の働きかけと児童の活動	郷土館職員の動きと留意点
1. 郷土館職員の紹介（3分） 2. めあての確認	・自己紹介と活動の確認
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">江戸時代の青森県はどのような様子だったのだろう。</div>	
3. 当時の青森県について知る。 【南部藩と弘前藩ができた経緯について】 もともと南部氏が支配していたことを知る。 ・本物の火縄銃を触ってみる。 【移動手段と北前船について】 現在と当時の移動手段を比べて、違いを知る。 ・大きな荷物を運ぶのには北前船を使った。 ・絵馬や写真などにその姿が残っている。 ・青森は、東廻海運と西廻海運、さらに蝦夷地（北海道）との海運が加わる重要な場所だった。 【北方との交流について】 青森と蝦夷地の交流について知る。 ・アイヌの人たちを通して中国やロシアとの交流があった。	・館職員が主となって進める。 ・青森は南部氏が支配していたが、大浦（津軽）為信が反乱をおこし、津軽を支配した。 ・当時は、陸路は徒歩。遠くへの移動や輸送には北前船を使っていた。 ・大きな荷物の運搬は船を使った。津軽の深浦・鯉ヶ沢・十三湊・青森、南部の田名部・野辺地・八戸等は北前船などで栄えた。 ・北前船の絵や写真、動いている映像を見せる。 ・もともとは波の穏やかな日本海を通る東廻海運で京都や大阪へ向かっていた。航路の改良により西廻海運で江戸とつながった。 ・青森からは米を運び、北海道からは海産物を得ていた。北海道からもたらされる蝦夷錦など外国産の物は珍重された。 ・北海道への出稼ぎや、飢饉により食べ物を求めて渡る人もいた。

<ul style="list-style-type: none"> ・津軽や下北にはアイヌ民族が居住していた。 ・青森県の各地にアイヌ語と思われる地名が存在している。 ・大変で悲惨だった北方警備。 <p>【青森に関する江戸時代の著名人たち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安藤昌益 ・松田松陰 ・伊能忠敬 ・新渡戸伝 ・平尾魯仙 <p>【庶民の様子】 「農業」「漁業」「生活」「年中行事」等を知る。</p> <p>4. 学習のまとめ</p> <p>青森は、江戸・大阪・蝦夷地を結ぶ重要な場所であった。しかし、庶民の暮らしは飢饉の影響などもあり、貧しいものであった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ語と思われる地名について（例） 「川」＝「ナイ」「ペツ（ベツ）」→奥内・野内・平内・襦内、今別・野辺地・苫米地・馬淵など ・ロシアの南下で、蝦夷地の警備を命じられた。斜里に派遣された弘前藩100名のうち生きて戻ったのは17名。藩の金銭的負担も大きかった。 ・安藤昌益：江戸時代中期の江戸の医師で思想家。『自然真営道』を著し、平等思想を唱える。 ・松田松陰：明治維新の精神的指導者。松下村塾で伊藤博文などを指導。ロシアへの防備を見るために来青。各地に記念碑等がある。 ・伊能忠敬：日本地図作成の測量のために来青。 ・新渡戸伝：盛岡藩士。不毛だった三本木原（現十和田市）を開拓。私費を投じている。 ・画家・国学者 ・比良野貞彦の「奥民図彙」や菅江真澄・平尾魯仙等の描いた絵などを紹介して伝える。 ・飢饉の様子なども伝える。
--	---

※学校側の要望にあわせて、時間配分や内容等を変更して解説することもできます。気軽にご相談ください。